

ソニー・ロリンズ 独占インタビュー
Contemporary Jazz Magazine

第34巻第9号(通算第395号)
平成22年8月12日発売
(毎月1回14日発売)

jazzLife

9
2010
SEPTEMBER
定価 880円

Cover Story

大西順子

レーベル移籍第1弾
『バロック』を語る

【スコア】

イツ・オールライト・ウィズ・ミー
ソニー・ロリンズ

クール・ストラッティン
ソニー・クラーク

ジュビレーション
ジュニア・マンズ

ア・スリーピン・ビー
ケニー・バレル

コンファメーション
ハンク・モブレ

パノニカ
ピアノ・スコア

【ギター・レジェンズ】
リー・リトナー
ラリー・カールトン
ジョン&バッキー・ピザレリ

【夏休みスペシャル講座・第2弾】

THIS IS JAZZ

“これがジャズ!”の名曲・名演を徹底研究

【特別セミナー】

ゲイリー・バートン & 小曽根真

ジャズ・クリニック誌上中継

ジャズ入門●第4回

日本のジャズ

昭和40年代後半
世界に飛び出した日本のジャズ

Jazz Colossus

SONNY ROLLINS

来日直前! 祝80歳記念特集

ソニー・ロリンズ

Jazz Life
Best Selection

ジャズライフ・セレクション
オールタイム・スーパー・ベスト
『ジャズ・コロッセウス』発表!

【スペシャル】

ランポーネ&カツツアーニの工房を訪ねて
海外ジャズ・フェス・レポート(モントリオール、ノース・シー)
この秋行きたいジャズ・フェスティヴァル(銀座、横濱)

【インタビュー&コンサート】

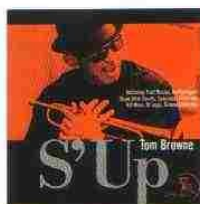
ジュニア・マンズ/ラーシュ・ヤンソン/マイク・モラスキー
トム・ブラウン/中村健吾/大石 学/小野塚晃/竹内 直
ジェシ・ヴァン・ルーラー/EQ/the MOST/PINK BONGO



臨場感あふれるファンキー・アルバムに

70年代からファンク&フュージョン・シーンで活躍し、「ファンキン・フォー・ジャマイカ」の大ヒットを生んだトランベッター、トム・ブラウン。しかし、その後飛行機のパイロットに転身し、その音楽の才を惜しまれていたが、ようやく音楽シーンに復帰。中村照夫プロデュースのもと、素晴らしい作品を完成させた。そのトムが語る！

取材：工藤由美 text：Yumi Kudo
写真提供：ポニーキャニオン(Cheetah)



「ワッツアップ」

トム・ブラウン

ポニーキャニオン(Cheetah)PCCY-30170

B/16リリース

●収録曲● ①ラメント ②フリーウェイ ③T'sグルーブ ④ローリング ⑤アイル・ビー・ゼア ⑥ミス・メアリー ⑦フロム・アバヴ ⑧スリー・コース&ザ・トウレス ⑨(イースト)カラカ・スワング ⑩ホエン・ウィル・ゼイ・ラン... ⑪ソウル・ストラット
●パーソナル● トム・ブラウン(tp,flh,ds-prog,synth)、ジェイ・ロドリゲス(woods)、フレッド・ウェズリー(tb)、スペースマン・バスターソン(g)、パブロ・ヴァーガラ(p,kb)、オナジェ・アラン・ガムス(p)、バーニー・マッコール(moog)、アル・マクダウエル(b)、ゲンジ・シライシ(ds)、クリス・セバーク(perc)、チャギー・カーター(perc)、ビル・ウェア(vib)、DJ ロジック(turntable)、中村照夫(prod)
●録音● 2010年 NY/カンボ・スタジオ録音
■ 2009年のMt.フジ・ミュージック・フェスのステージで、その完全復活を強く印象づけたトム・ブラウンが、満を持して発表した最新作。

●●●●● Interview

トム・ブラウン Tom Browne

みんなで演奏し、互いに触発し高めあうことで生まれるエナジーが捉えられた

——新作の「ワッツアップ」は久しぶりのアルバムになりますが、「音楽の世界にお帰りなさい」と言っていていいですか？

トム・ブラウン(以下TB)：ホントだね。とても楽しんでいるよ。今はテルオ・ナカムラとの仕事を満喫している。声を掛けてもらったタイミングがよかったんだ。

——アルバムのタイトル「S'Up」は、正確にはどのように発音するのですか？

TB：これは、「ワッツアップ」って発音する。これはもちろん「What's Up」から来ていて、「元気？ どうしていた？」という意味だ。

——新作のプロデューサーである中村照夫さんとは、以前から知り合いだったのですか？

TB：テルオに最初に会ったのは1975年ぐら

いだったと思う。そのころ照夫は、NYでライジング・サンという人気バンドを率いていて、レコードもヒットさせていた。テルオはずっと僕の好きなベース・プレイヤーのひとりだった。そんなわけで面識はあったけど、2年前に突然電話をもらったときは、驚くやら、うれしいやら。最初の依頼は、グルーブ・コレクティブのトランベッター・パートをやってほしいとのことだった。そのあと別のアーティストの仕事が頼まれて、送られてきた音源に自宅でオーヴァーダブした。たぶんそのふたつの仕事で昔のことを思い出し、アルバムを作ってみないかと声をかけてくれたんじゃないかな。もちろん、「喜んで」と返事した。

——照夫さんから話があった時、どのようなアルバムにしたいと思いましたか？

TB：売れ線を意識せずに、自分たちのやり

たい音楽をやろうということだった。臨場感あふれるファンキー・アルバムにしたかったので、スタジオ・ライブにした。

——このレコーディングには、中村照夫ファミリーのミュージシャンが全面参加していますね。

TB：自分のレギュラー・バンドは他にあるけれど、グルーブ・コレクティブの連中とは何度か仕事をしているし、腕の良いミュージシャンばかりなので、むしろ大歓迎だった。去年はグルーブ・コレクティブのゲストとして日本に行き、Mt.フジ・ミュージック・フェスティバルでも演奏している。阿吽の呼吸で仕事ができるし、僕自身、とても啓発された。

——オリジナルが5曲ですね。

TB：5曲が僕のオリジナルで、グルーブ・コレクティブのジェイ・ロドリゲス(woods)が3曲、ヴァイブ奏者のビル・ウェアとドラマーのゲンジ・シライシがそれぞれ1曲ずつ曲を提供してくれた。いろいろなフィーリング、いろいろなアティチュードを併せ持つアルバムにしたかったので、複数のライターを起用したんだ。コンビネーションによってアルバムに幅が出ると思うからね。それに、自分の曲を演奏するのでもいいけれど、他の人の曲を演奏することで別な自分に出会える、と

したかったので、スタジオ・ライブで録った

いうこともある。

—スタジオに入って、いかがでしたか？

TB：良い気分だった。これはスタジオでライブ録音したもので、みんなで演奏し、互いに触れ合えることで生まれるエナジーを捉えられていると思う。それぞれの演奏に反応しながら、その場で自然発生的に音楽を創作する。すごく楽しい。

—その意味で、これはまさにジャズ作品ですね。

TB：そうだね。インプロヴィゼーションが大好きあるし、その場で即興もしているし……。

—マイケル・ジャクソンの「アイル・ビー・ゼア」をカバーしています。

TB：マイケルが亡くなったこともあり、この曲を取り上げた。でも、マイケルのサウンドを真似たくなかった。ソフトなドラムをバックに、マイケルを偲びながら、トランペットでしっかりと歌い上げている。彼がいかに音楽業界に貢献してくれたかを思い出しながら、感謝を込めて演奏した。

—「(イースト・)カカラク・スワング」というミュート・トランペットをオーヴァー・ダビングした曲がありますが、これはどのような曲ですか？

TB：あの部分は、自宅で録音したものを後からインターネット経由でNYのスタジオに送った。まったく便利な世の中になったよ(笑)。「カカラク」はノース・カロライナの別荘。地元の人間はこう呼ぶんだ。スワングはスウィングから来ている。かつて生まれ故郷のNYクイーンズ地区ジャマイカを取り上げた曲(「ファンキン・フォー・ジャマイカ」)に似たように、今、自分が住むノース・カロライナを音楽にしたかった。ここは面白いところで、州西部はカントリー・ミュージックとブルー・グラスの宝庫、東部にはブラック・アフリカン・ミュージックの伝統が脈々と受け継がれている。そのことに敬意を表した。

—ラストの「ソウル・ストラット」もクールなナンバーですね。

TB：これは20年前に書いた曲。ファンクがベースのハッピー・チューンで、「ピクア・オブ・ザ・ビーゼズ」のような感じの曲だ。

音楽と並行して航空関係の勉強を続け 大学時代にパイロット・ライセンスを取得

—ところで、今でもあなたは「空飛ぶトランベッター」、いや「演奏するパイロット」なのですか？

TB：ハハハ。今は、ほとんどフルタイムで音楽活動している。少しは航空関係の仕事をしているけれど、以前ほどではない。

—ミュージシャンとパイロットという憧れの職業をふたつも手に入っていましたね。

TB：自分では意識したことがないけど、そういうことになるかな。父が気象予報士として空港で仕事をしていたこともあって、子供のころから航空の世界に興味があった。それで音楽と並行して航空関係の勉強を続け、大学時代にはプライベート・パイロットのライセンスを取得した。音楽も大好きだったけれど、将来は空を飛んで身を立てるようになるだろうと思っていた。それが思いがけずGRPレコードと契約でき、そればかりか81年には「ファンキン・フォー・ジャマイカ」がヒットしたため、音楽に専念することになった。でも、ご存知のように音楽業界は浮き沈みが激しい。それに職業パイロットは、ある程度若いうちじゃないとできない仕事でもあるので、80年代後半には空の世界に復帰、そこで生活の糧を得るようになった。

—コンチネンタル航空のキャプテンを務めていたと伺いました。

TB：といっても、子会社のリージョナル・エアラインの小型機だけだね。その前には、FEDEX関連の仕事で10年近くやっていた。最初のうちは、音楽活動を続けながら空を飛ぶ生活をしていただけで、コンチネンタル航空に移籍してからは忙しくなって、自然に音楽の世界から足が遠のいた。それでもマイペースで演奏は続けていたし、2003年にはアルバムもリリースしている。

—それで、また本格的に音楽の世界に舞い降りたというわけですね。

TB：2年前に航空会社を退職して、フルタイムで音楽活動をするようになったんだ。

—何がきっかけだったのですか？

TB：定年後も末長く楽しめることを仕事に

profile トム・ブラウン

1964年、NYのクイーンズ地区ジャマイカに生まれ、ロニー・ホワイト、マーカス・ミラー、バーナード・ライトらと切替球磨しながら育つ。やがてロニー・リントン・スミス、ロニー・キューパーらとの共演で注目を集め、79年にGRPレコードと契約。81年には「ファンキン・フォー・ジャマイカ」が大ヒット、Billboardチャート1位、英トップ10の大ヒットに。80年代後半から音楽とパイロットの二足の草鞋をはき始めるが、90年代にはヒップホップ・レーベルでも活躍。2年前に航空会社を退職、現在はフルタイムで音楽活動している。

■使用楽器：プラスワックス(ペン・ショウ)の「トム・ブラウン」カスタム・モデル・トランペット。
http://www.tombrowne.org/home.htm
http://www.myspace.com/tombrownejamaicafunk



したかった。70歳や80歳になっても仕事ができるのは、やはりミュージシャンだ。音楽の世界には定年はないからね。それに空の仕事は、家を空けることがあまりに多かった。その点、音楽なら僕がロードに出るとき、妻や子供がついてきてもエンジョイできる。家族、そして音楽……。年をとってきて、自分の人生にとって何が大切か、だんだんわかってきた。それで決断した。それにしても、やはり音楽はエキサイティングだ。昨夜はヴァージニア州北部で開かれたジャズ祭で演奏した。ロイ・エアーズ(vib)、ジャズ・クルセイダースのウェイン・ヘンダーソン(tb)、ロニー・ロウルズ(sax)、ジェフ・ローバー(kb)らに再会し、旧交を温めてきたんだ。

—名前が知られているとはいえ、カムバックは大変だったのでは？

TB：確かに昔に比べると難しくなってきたと思う。でも僕はジャズ・ミュージシャンとして育っているので、小さなクラブで一晚に3セットやることも、午前3時まで演奏することも厭わない。ジャズ・ミュージシャンは、みな少ないお金できつい仕事をすることに慣れているから。でも、どのようなシチュエーションであれ、プレイできることは素直にうれしい。真面目にこつこつやっていたら、そのうち少しは金もついてくるようになるだろう。ゆっくりいこうと思う。

—「ワッツアップ」で音楽活動に弾みがつきそうですね。

TB：GRP時代のセンスを上手く生かすことができた。最高のフィーリングのアルバムになったと思う。まだまだこれからさ(笑)。■

左から、ジョン・アルトシロー(a-ang)、ジョー・バーガー(eng)、スパーマン・パターソン(g)、ジェイ・ロドリゲス(woods)、中村龍夫(prod)、トム・ブラウン(tp)、ビル・ウェア(vib)、アル・マクダウェル(b)、ゲンジ・シライシ(ds)、パブロ・ヴァーガラ(p)。

右から、トム・ブラウン(tp)、中村龍夫(prod)、フレッド・ウェズリー(tb)、ジェイ・ロドリゲス(woods)。

